

北海道民間説話の研究(その七)

中村純三版『江差の繁次郎』話生成とその影響

阿部敏夫

目次

はじめに

第一節 北海道内の『江差の繁次郎』話の事例

第二節 分析

第三節 考察

(一) 中村純三の略歴

(二) 「江差の繁次郎」話生成の経緯

(三) 中村純三版『江差の繁次郎』話の話名

まとめ

はじめに

日本昔話の「笑い話」中に「巧智譚」がある。「おどけ者」という主人公が庶民の代弁者として登場し、権力者をやり込める話が多い。本論でとりあげる主人公は、北のおどけ者と言われる「江差の繁次郎」である。鯨漁場を舞台にして語られた小話である。その小話は北海道の日本海沿岸、津軽海峡を挟んだ東北地方で話されたものである。鯨

(一)

漁に出稼ぎに来た「ヤン衆」と言われた人達がその小話の語り手である。

本論は、その語られた「江差の繁次郎」話(第一節では中村純三が取材した江差、函館地域以外の北海道内の「江差の繁次郎」話を事例として取り上げた。)をもとに、「函館新聞」紙上で、さらに翻案・創作活動を展開した中村純三という新聞人の人物像とその影響に焦点を当てて考察する。尚、筆者には、中村純三版「江差の繁次郎」話も含めて「江差の繁次郎」話として流布されていると考えるので、鯨場で語られていた話と中村純三創作の話とを明確にしなから「江差の繁次郎」話を論じるという必要があると考える。なぜなら、民間説話の生成過程を探るヒントになると考えるからである。

第一節 北海道内の『江差の繁次郎』話の事例

事例1

増毛の「江差の繁次郎」の話

草葉の蔭・闇夜のカラス・残りは雪なげ・あいの風・観音さんの日

キーワード：中村純三 函館新聞社 繁次郎

は休み・ホラ吹き合戦・ニシンとり・山の薪切り・合わせて六本・イカが一ぱい・クルマゲ・草食う馬など。

増毛町文化財専門委員会編 『増毛地方の民俗資料と文化財』(増毛町教育委員会一九七五年 二七頁より) ※話の話名

事例2

積丹半島の「江差繁次郎トンチ話」

① 繁次郎は名船頭

なんでも江差の繁次郎って男は大ぼら吹きで、アンパイだけで生きてるような男だったそうさ。ある時、鯨場の建網親方が船頭を新規に募集したら、さっそく繁次郎が名乗りを上げてきた。

「鯨とりだら俺にまがせでくれ、俺は鯨場の神様っていわれだ名船頭だぞ」

というわけだな。そういうわれで親方も雇うことになった。

ところが、本当は漁のこどなど何も知らねえんだが大変だ。網の建て方もわからないが、魚の入ってくる手網も反対側につけてしまったりして、話にもならねえんだって。

そうしているうちに、どんどん鯨が群来できて大漁になってしまった。はだりの人たちが、

「ほら、早くワグまわさねば！」

って声するべたって、繁次郎はどうせいいが分らなくなつて、ただただ大声でどなっているうちに、足すべらで海へ落ちってしまった。

若い衆がたまげで、

「船頭が海さはまったぞ！」

って、助けようとしたっけ、繁次郎は海の中から、

「俺さかまねで、早くワグ回せ、何してけずがる、このー！」

と怒鳴っているんだと。

その日は年配の漁夫の指図で仕事が進んで、無事に鯨の沖上げが終わった。繁次郎はおかげで恥さらさないで済んだわけだが、一段落してがらゆうゆうど着替えもすませでもどつてきて、上座にすわって言うには、

「みれ、今日はうだで鯨が獲れだでねが、お前たちも俺みだいに、自分の体をなげだして魚とりに精ださねばねもんだぞ！」

と大威張りで説教したもんだ。これには皆も煙にまがれでしまったぞうだ。

(泊村 宮川佐太男談 大正4年生)

② イカが「いっぱい」とれた

ある日、繁次郎が皆どイカつけ(漁)に沖へ行つた。ところが、その日はさっぱり漁がなくて、誰も舟に積んだ樽の中は空っぽだったんだってね。

したら、帰ってきた繁次郎が大きな声で、

「俺だら樽に「いっぱい」とつてきたぞ！」

って言うんだと。皆でびっくりこいで、今日は誰もとれなかつたのに、下手くそなお前にとれる筈ないべ……って思ったのさ。でも、本人がハッキリ言うことで、浜さぞろぞろどつて見に行つたもんだ。繁次郎の舟へ上つて、樽のフタとつてみたところが、なんとなんと底の方に小さいイカが一匹ちよこらつと入っているだけでないが。

「ほら、ちゃんと一パイ(匹)あるでねが」

って、後がらついできた繁次郎がニヤニヤしながら言つたどさ。

(岩内町 山内その談 明治35年生)

高橋明雄『積丹半島の民話をたずねてー岩内・古宇郡における収集

と分析―(自家本一九八五年 九頁より)※話者は、戦前練場で働いていた人から聞いた話としている。尚、話者一覽を末尾に紹介する。

事例3

門別の「江差の繁次郎」

江差の繁次郎がね、一年中休んでも、まだ何日か貸しあるんだって。一年間のうち一日も稼がなくてもまだ休みが何日だか貸しあるんだって。

これは「観音様の日」という、繁次郎話の中の、時の権力者や親方連中を民衆の側からやり込めた話の一つである。江差には古くから信仰で観音がけという風習があった。旧の四月八日ごろ、某寺から元山のふもとに入り五勝手庵寺までの約二里(八km)近い道のりに、三十三体の観音の石仏を随所に建ててあり、むつまじ講や気の合った者同士が一日がかりで参りながら歩く。観音がけの日は仕事を休むという親方の許しをもらい、一日観音をお参りする。一か月三〇日とすれば三日分は親方に貸したということになる。

(厚賀・福島政雄談 大正4年生)

門別町史編さん委員会編『新門別町史 下巻』(門別町 一九九六年 五七七頁より)

事例4

江差町の「繁次郎」話

「繁次郎口上」「繁次郎ばなし(七〇話)」「私の『繁次郎』論(五名)」の三部構成になっている。話は「附録別表B」九八頁 参照

江差かわら版同人会編『江差の繁次郎』(江差文庫社一九八八年 一八三頁)

事例5

乙部の「繁次郎」話

繁次郎話を、①漁業、②山仕事、③村内、④権威者に関するものに分けて載せてみる。

①漁業に関する話

最も人々に知れ渡っているものの一つは「杵まわせ」の話である。○杵まわせ 繁次郎が樺太に出稼ぎに行ったんだね。自分は船頭で行ったんだと。船頭の杵組みも知らないでね。網起こせば、魚のるべき、杵組むって杵つけるんだものね。杵のつけかたも何も知らねで、そこへどつとニシン乗ったどこで、杵つけること知らねから、杵つけるふりして船のなか走って歩いて海さどつと落ちたもんだと。若いもの、「ああ、船頭海さ落ちた」

って、大騒ぎした。

「いやいや、船頭ば助けねばね」

ってね、繁次郎は、

「オレさかもねくてもいい、ナ(お前)先に杵回せ」

って。若い者杵回したっけ、繁次郎上がってきたって。

(田中直一談 明治42年生)

②山仕事は、おおげさなものではなく、「シコロの木」の話などのような手間仕事といった性格のものである。

○シコロの木 山にねシコロ(船の下にあてる丸太)切りに行ったんだと。わざわざみんなひと背負いね、七コロも八コロも背負ってきたんだと。繁次郎たった一コロ背負ってきたんだと。親方、

「なんだ、船頭、若いものみんな七コロも八コロも背負ってきたのにお前たったの一コロか」
って。繁次郎あ、

「いやいや、オレの木ね、これ一つでもシコロっていう木だ。だから四コロ背負ってきたことになる」

といった。

③村内の笑いに関する話

(田中直一談 明治42年生)

日常生活のなかに出てくるさまざまな笑いを素材にしたものでいちばん数も多い。

○ばばカレイだ 婆さんが繁次郎に水汲んで来いとバケツやったら、つまずいて転がったって。水こぼして川みたくしたら、そこに婆さんの杖と草履があったから、杖で草履をつっかけて、繁次郎が、

「これ、婆、カレイっこだ」

といったと(田中弥之助談)。

○繁次郎のいっつけ 繁次郎がニシン場の親方に使われてあったの。江差のニシンがとれなくなっただとで、積丹というニシン場に行ったのさ。親方の舟がニシン積むのに積丹さ行ったとさ。船頭が、

「繁次郎、繁次郎、親方とこさ明日、ニシン積んで帰るどで何かいっつけないか」

といったとさ。したっけ繁次郎、

「何もねじゃ。行ったらよ、早くくたばれといっつけ。そういえばわかるから、早くくたばれといっつけ」

といったと。家さ来て、その船頭が大事な親方に早くくたばれといっつけ何がなんでも親方さ聞かせねばと思っつて、親方のとこさ来て聞かせたとさ。親方も親方だ、

「あの野郎、そんなことばいっつたか。うつと悪くいっつてやる」

と。そしたけ繁次郎帰ってきたとさ。親方が、

「繁次郎、繁次郎、ナ(お前)ど。オレば早くくたばれといっつたてな」といって、繁次郎は、

「ああ、いっつたぜ。船頭は、何人からもいっつけしたからオレ、お前ごといいつけしないかと思っつて、お前ごとくたばれといえれば必ず聞かせるかと思っつて、早くくたばれといっつた」

といったと。親方も、

「ほんただだか」

といった。

(麓 政雄談 明治43年生)

④権威者に関するもの

殿様、役人、親方などを知略でうちまかすという話である。

○帽子に鳥こ 繁次郎が、糞ね。通り道にしてね、はっと思っつて自分の被つたシャツポ(帽子)ね、さつと被せた。通行人が、

「やあやあ、繁次郎、何やってた」

つていっつたけね、

「いや、オレ、ここに鳥こ、いま入れてた」

つて。

「珍しい鳥だ、ナ(お前)ここに来て捕まえねか」

つてやったけあ。その人また、

「やあ、ほんだかほんだか。繁次郎、いまオレ捕まえるから」

つて、そつと捕まえたつて。(田中直一談 明治42年生)

通行人が巡査であつたという語り手もいる。

○観音さんの日 繁次郎が観音さんを信心しているので、お参りの日に休みをくれと親方に頼む。次の日、繁次郎は観音さんの日と称してお参りに出かける。ところが、

「今日もお参りだ」

「今日も」

と大っぴらな顔して出かけるので、親方が何日休むつもりだと文句をいう。繁次郎は、

「観音さんは三三三体あるんだもの、一か月かかってもまだ三日も親方さ貸してあるんだ。これでは足りない」といった。

(山本久五郎談 大正7年生)

乙部町史編さん審議会編『乙部町史 下巻』(乙部町 二〇〇一年三月一三九二頁より)

第二節 分析

事例は現在、北海道内で収集されている「繁次郎」話である。中村純三が「函館新聞」紙上で掲載する以前から語られていた話であることが話者の聞き取りからわかる。増毛・積丹半島周辺・江差・乙部などの日本海沿岸、そして門別の太平洋沿岸に伝承されている。花部英雄・新田寿弘・佐々木達司の東北地域の「繁次郎」話記録集(注1)を考えると東北地域にも伝承されていることがわかる。事例では、ニシン漁が行われなくなつてから久しい時点ではあるが、その伝承状況を推測することが出来る。話数についても次節で紹介する中村純三のいくつかの著書(特に、『真説江差の繁次郎』)からわかる。附録・別表A～Fでも確認することが出来る。※話の内容はほぼ同じなので「話の内容」説明は省略した。

第三節 考察

(一)では、中村純三の人物像に焦点を当てる。

(二) 中村純三の略歴

①ぶやら新書 『真説 江差の繁次郎』(二頁)によると略歴は、以下のように紹介されている。

著者紹介

なかもろしゅんぞう
中村純三

- 一 大正十二年(一九二三)一月十二日上磯郡上磯町に生れる。
- 一 函館商業学校卒業後、上磯町漁業協同組合に奉職。
- 一 母の死に遭い、曹洞宗に帰依、得度。
- 一 昭和十九年(一九四四)四月から終戦まで横須賀鎮守府従軍僧。
- 一 復員後、函館新聞社に入り、昭和二十三年(一九五三)、報道部長次長、昭和三十年(一九五五)、社会部長。
- 一 函館新聞廃刊により文筆生活に入る。
- 一 現在、東洋毛織株式会社企画室長、函館文芸協会理事等。

②同ぶやら新書の(あとがき 六〇頁)には次のように記述されている。引用が長くなるが紹介する。

「江差の繁次郎」と称する人物の頓智話は明治以後の道南に広く語り伝えられていたようだが、果して実在の人物であったかどうか明らかではない。

戦後、拙著『江差の繁次郎』が出版されて間もなく、江差町の郷土史家増田章三氏が、同町の法華寺の過去帳の中から「俗名繁次郎、行年六十二歳、慶応二年歿」というのを発見したが、この仏様が頓智の神様、繁次郎であるという証拠もないのである。

俗説に従うと、生まれは江差在の五勝手。親は能登衆で、金鍔屋兼一杯屋をやり、カマドを返して泊村の城の口に移ったという。

繁次郎は四十過ぎまで母親と二人暮しで、ほら吹きのおけ者。酒よし、ボタ餅結構なうえに、女にかけては目がなかったということである。

五尺に足りぬ小男で、目と鼻と口がむやみにでっかいというのだから間違っても「色男」の部には入らなかつた。「函館新聞」がこの人物をとり上げ、連載することになって、私に白羽の矢が立った。

上磯町生まれの私は江差となんのゆかりもないし、「繁次郎」の名を耳にはしていたが、どんな頓智話があるのか皆目見当もつかないの
で一応も二応も辞退したが、編集局長が「繁次郎ってのは君によく似た男らしいから……」と、妙な理屈をつけて押しつけてしまった。

昭和二十三年十一月二日に江差へ出かけ、翌三日、文化の日にどしゃぶりの雨の中を江差支局長の上野理一郎氏(元江差町助役、現在は奥尻村助役)に引ッぱり回され、町内の古老を七人ほど訪ね歩いて、十五、六篇のネタを辛うじて仕入れた。

書きはじめると意外に反響があり、読者からネタが舞い込んだりして書く方も楽しくなつて来たが、社の新聞販売政策から「ながく連載してくれ」と頼み込まれたのは閉口した。

そんなわけで、やむを得ずフランス小咄を焼き直したり、落語のネタを搔ッ払って読者を欺し続けた次第。その罪、万死に価すると言えばチト大げさだが、いささか罪滅しの意味もあつて△ぷやら新書▽には江差地方に遺されていた、純粹の繁次郎話だけを集録させて頂くことにした。

言わば「真説江差の繁次郎」というわけで、最後の艶笑譚は△ぷやら新書▽のために書きおろしたものである。

また篇中の「俺の物」は焼き直し小咄の中で一番よくできたのを一つだけ例外として拾い上げたし「カラス問答」は本文にも断つたっており、道南の方言を遺す意味で集録したが半ば以上が創作であることをお断りして置く。

繁次郎咄は、そもそもが艶笑譚に発すると言われるくらいで、集録した四篇のほかにもたくさんあるのだが、とても紳士淑女にはお目にかけることができないケツサクばかり。それにこの種のオイロケ咄は私の最も不得手?とするところなので、ここ当分は陽の目を見せずに、貴重なメモ帳はそのまま机の片隅に押し込んでおかなければなるまい。

それはともかく「繁次郎」を書いたばかりに、中村純三というれつきとした名前があるのに、だれも「おーい中村君」と呼んでくれず、末ッ子娘にまで、ときどき「シゲさん」と呼ばれるのは苦笑のほかはない。

所詮、「江差の繁次郎」と私は宿世の縁に結ばれているものと考え、三たび出版される俸せを心から喜んでゐる次第。

「ぷやら新書」の特殊性と、この冊子が持つ一種の權威を汚しては、と気を配りながらまとめ上げたつもりだが、果して期待にこたえられたかどうか。特に、アクの強い方言を駆使している点には、いままって一抹の不安を感じている。

自家葉籠中の材料のはずなのに、かえって料理しにくかつたということは筆を執る者に共通の「業」というものなのかも知れない。

(傍線は筆者)

(二)「江差の繁次郎」話生成の経緯

(記者時代の同僚)上野理一郎の話(月刊はこだて) 別表 九
六頁参照より)によると次のような経緯で中村純三版「江差の繁次郎」話が誕生した。引用が長くなるが紹介する。

①「蝦夷風流譚」といったとてつもない古風なタイトルで江差の「繁次郎ばなし」を書いてゐる中村純三君は通称「繁さん」と呼ばれてい

る。繁次郎物語の作者であることに由来しているのだが、ほんとうの名が、繁次郎とか「繁……なんとかというのかな」と思い込んでいる人が多い。

当のご本人も純三という恰好のいい親からもらった名前があるのに、これが一向通用しないばかりか、「バッチコリ末子のこと」から「繁さん」と呼ばれて目を細くしているのだから世話はない。

このことは昨年頂戴した年賀状にちゃんと書いているから私のフィクションではない。それ程繁さんには繁次郎話がしみ込んでいる。

そのころ「オーイ中村君」というレコードが売り出され、「しげちゃん」は唄に調子を合せて、さかんに「中村君たること」をアップピルしたが、唄もあまりパツとしなかつたようにもう「しげさん」は中村君でなく、「繁さん」になりおうせていたのである。

こんなこぼれ話がある。ある宴の場でたまたま繁次郎話が話題になり、作者の「繁さん」を知っていると口をすべらしたら、たちまち取り巻いていた美人連から「繁さんのサインがもらえるかしら」「繁さんを紹介して頂戴」とせがまれた。女性達はおのずから繁さんは一流どころの小説家で、どちらかといえばヤセ形の長身、ベレー帽などをチョツと横あみだにし、願うことなら、長髪の品のよいロマンスグレーが帽子のすそからのぞいている……といった風さいを想像しているのである。

ベレー帽はご想像の通りだが、惜しいかな長髪の方は当て外れ、見事な円頂光頭はかくれもないこと、今東光さんを小型にした繁さんを連れ出したところで、仕組んだいたずらと思うのがオチ、繁さんへのイメージをこわしたくないし、それが繁さんに対するせめてもの思いやりと独りぎめして、このことはまだ実現していない。

初版のころの繁次郎はしばしば熊石在七面山という寺の作男となつ

て現われているが、近ごろでは数枚格が上って、立派な和尚さんになっている。その和尚振りにも堂に入ったビヨウ写が続く。

これは無理からぬことで繁さん自身レキとしたお坊さんなのである。繁さんが函新に入社するときの学歴は函商中退となっている。原因は学業不振とか、ご法度の桃色ハレンチでないことはたしかである。

これはその後私が旅で勤めていたとき、その地方の名士で繁さんの同期生から二、三度聞いたことがあるからご本人の説を額面どおり信じていい。

だが、函新の記者採用条件「旧制中等学校卒業以上」にひっかつた。しかし繁さんの文才を惜しんだ編集局長はなんとか救おうとアレコレせんぎしていると、繁さんは難関でしかも戒律きびしい東京の曹洞宗本山で得渡、僧籍にあることが分った。

「しめた」膝をたたいて編集部長さん直ちに専門学校卒業相当の学歴と認定して採用に及んだのである。だから繁さんの月給は同時採用の中卒より、ちよつぱり高かつた筈である。又僧籍にあつたお陰で、戦時中新兵で海軍に召集されたが従軍僧に回され、はげしい訓練にもシゴかれず、両手合せ「ナンマイダ」と行いすました日々を過ごしたという。

それより半年ほど前、函新の支局長会議があつた。物の不自由なときで、宴をまつ間の陰気くさいなかで、森の支局長がボソツト江差支局長に「江差の繁次郎って何者だい」「オヤ、森にも繁次郎があるのかい」これが口火になって、しばし明るい繁次郎話に花が咲いた。

いつの間にか話の仲間入りをしていた編集局長「そりあ。なかなかいかすじゃないか」繁さんは上磯支局長で顔を出していたが、今の奥さんと熱い恋をささやいていたときのこととて、二人は貧乏タカレの

漁師のおどけ話には全く興味を引くわけがなかったのである。

会議の帰りには秋雨に冷たくぬれた舗道を歩きながら、手一ぱいオノロケを聞かされたものである。

(元函新記者)〔繁次郎馬鹿噺(上)〕一九六八年

②湯の川の支局長会議で江差支局の繁次郎話について「いかす話です。しかしこのままではいつか消えるでしょう。江差で研究している人もいて、相当書き溜している。早く本にするようもちかけているが、さっぱり乗り気でない。物語りはツヤものが多いので、私のような不器用な筆ではパツとしない。誰かペンの柔らかい記者で早く活字にすれば、それが家元になりますよ」力説したが、空気はあまりパツとしないままに終わった。

だから帰りの繁さんのノロケ話に対しおつむ具合が子供の二、三人もある面をして「ほどほどにシヤアガレ」江差支局長は話上手につられながらも、ヤケ鉢で腹の中でそう思っていた。

こんな事もいつしか忘れた頃、ある日繁さんがひょっこり江差支局に現われた。

例によってノロケを一席ブツと後気抜けしたような口調で「繁次郎話を取材に来たんだが……」という。雨降りのジメジメした日だったが、勢いついて早速心当たりの古老を訪れたものの、茶受け話で「サワリ」のくだりは知っているが、さて物語と開き直られると誰れも「サア」と小首をかしげるばかり。取材はさっぱり目鼻がつかぬ。いま考えると繁さんは出張を早目に切り上げて、残った一日をデートしようと思っただけで、来る早々から函館に帰る話ばかりで、取材が思うようでもなく、こちらが気をもむ程身を入れない。

いろいろ計画しても肝心の繁さんの心は函館に飛んでいて、繁次郎

の話の方は上の空、帰る算段に余念がない。とうとうサジを投げて駅迄ブラブラと例のおのろけを聞きながら同行した。

「それで中村さん。彼女とキッスぐらいはしたのかい」

「トトとんでもない。まだ手もさわっていない。わしとしたことで、まこと情ない仕儀だが……」

「ホー、馬鹿に純情だな」「名が純三だ」

「繁次郎みたいなことをいうな」

「ウワー、ハッハー」彼独特の大口開けて笑ったとたん

「ウーン、うちの奴が来た！」ちょうど函館から列車が到着したのである。

「うちの奴って、誰だい?」「彼女だ」しばらく絶句していた繁さん、「こりや繁次郎そのけだ……俺アもう一晚江差で取材するべ……」

とニンマリ。函館ではその昔啄木がカニと戯れた砂浜辺りで、手も握らぬデートしか頭になかったのに思いもよらぬ彼女の方から両手を広げて繁さんの胸に飛び込んで来たのである。

若い記者が夫婦仲良く取材出張といったあんばいで、他ならぬ他郷で誰はばかることなく二人は、しっぽりぬれたのである。

繁さんご二人にとつて、その後メシの種ともなった繁次郎話とともに忘れぬ江差の一夜はヤキモチやきで名の通っているこの町のカモメ島の弁天さまもお許しになったのだろう。

繁次郎のネタは三ツ四ツ程度だったが、繁さんはそれよりも大きなタネを仕込んで、元氣よく彼女と手を取り合って帰って行った。

こんなわけで繁さんは五、六回ほど書けば出張の義理を果せる積りの軽い気持ちで書き出したのである。

ところが、書き出しから大好評で、尻込み気味の繁さんにデスクから原稿の矢の催促である。江差で仕入れたネタが切れかかる五回目当

りになると

「せめて一ヶ月は続ける」の厳命

「ウワー、彼女をものにしたのは上出来だったが、繁次郎はとんでもない重荷になっちゃった」半ペンをかいたが、そこはそれ、彼女とコーヒーをのみながらあの夜のことを思い浮かべてかどうか……：フランス小話や江戸落語のオチをあれこれひねくって、どうやら十五回ほどにこぎつけた。この頃から社の内外で純三君は「繁さん」と呼ばれるようになった。

繁さんはもともと器用な記者である。その頃函新に「リング」という欄があった。いまの道新の「こだま」である。当時の道新さんは「熊の目」といつており、ともにチョッピリワサビの効いたくすぐりを得意とした記事である。特にリングは採用されるとタバコ光一にありつける。タバコ目当てにダジャレを書く若い連中もいたが、繁さんはこの常連で、話の筋も一級品であった。

(元函新記者・「繁次郎馬鹿囃(中)」一九六八年)

③「リング」欄のファンが多かったことから種が切れると繁さんに直接ご用をおおせつけるのである。安受けあいと、いつもの癖である人指ユビを二、三度なめると蛇の、のたくりよろしくの文字が躍り上ってホロずっぱい味の記事をもににする。その器用さはあきれるばかり。またリング用の記事が夕刊のトップを飾ることもあり、逆にトップものが、巧みに歯ごたえのあるリング記事に化けているなど若い記者はここで記事のコナシのこつを学んだものである。

こなん具合だから繁次郎話の筆者に繁さんを名指した編集幹部の目は高かったわけ。だが最初のほどは、さすがの繁さんも音をあげるこたが、しばしば、とうとうとんでもない失敗をやらかしてしまった。

(九)

こともあろうにチョンマゲの繁次郎に英語を語らしてしまった。繁さんも白状しているように、最初の物語りには相当創作のものがある。それがどれも、トントン調子の評判なので、すっかり大胆なり、彼女とデートのコーヒーをすすり乍らニヤニヤと創作の繁次郎を書き上げる日が多くなった。

ある日ちよつとした言葉のはずみで、彼の女は荷造りのロープのことでオカンムリ、こつてり油を絞られた。デートはさんさんになるし、原稿はジャン、ジャン催促されるし、いい加減、頭に来て「どうともナレ」となぐり書きと相なった。

次の日の繁次郎話は津軽の金助の女房に、こつびどくやつつけられた繁次郎どん。ムシヤクシヤあげく

「コレ、おかが、ヤト(早く)ロープもつてこさい(来い)」…で一ちよう上り。

繁さんの原稿は早いこと天下一品、そのペンの走りもまた、ラジオ体操そこぬけの珍品この上なしである。一度や二度イヤ百ぺんお目にかかっても、そうかんたんに読める代物ではない。その難物ものものなぐり書きした原稿を投げ出されたデスクは、「面倒ごめん」とそのまま整理さんにポンと渡す、整理も心得たもので、内味には目もくれず工場に下してしまった。かくて繁次郎の独語はやすやすと活字となつて現われたのである。読者も人気のある読みものごととて、笑いこけ、繁次郎が英語を喋ろうと、どうしようも、おかまいなし、このミスには一言半句苦情の投書も注意もなかった。繁さんもこの話は、はじめて聞くことだろう。

さて物語りも十回を過ぎると道南の町村は申すに及ばず、遙かなる稚内、釧路など全道からネタや、助言、声援がどしどし舞い込んで来て繁さんの後半は苦勞なしで筆を走らせることが出来た。

それだけ民俗伝説の深さ、繁次郎ファン層の厚さが感ぜられ、函新は拾ものの馬鹿りし、繁さんは一やく人気者にのし上ったのである。

函新で繁次郎話が有名になると、今度はその子孫とか、血統者と称する人物が現われた。繁さんも噂の主を尋ねたこともあったが、どれも眉ツバで尻切れトンボに終わっている。人氣が呼んだ余波である。

繁次郎話のほんとうの味は、当時の藩政に対するウツブン晴で、庶民のはかない抵抗がミソであると物知り顔の人もいる。しかしニシンの大漁に沸いた飯場の一服どきとか、漁師連が切り上げた冬ごもりの炉辺で、長い夜のたいくつをまぎらせるにはあまり凝った深刻な話では間(マ)がもてない。それに函新の紙面を賑わした頃は終戦の痛手が生々しく、物の不足に悩む、いん気くさいときであったから肩のこらぬ小咄が、理くつ抜きでかつさいされたのである。

繁次郎どんに似通った話は九州の片隅から北の国の果まで全国の漁村にあるそう。北海道でも江差の外寿都、岩内、留萌とニシン場を流れている。遠くはカムサッカまでも及んでいる。ニシンを追うて転々とした漁師が、各地の飯場で振りまいたのだろう。カムサッカには江差一带から北洋に出稼ぎしているから、これは本場ものである。

繁さんは時折、柄にもなく、何の因果か繁次郎はんに喰いつかれてしまうとしよげるが、恋女房を手に入れ、めしの種にもしたし子供か
らまで「繁さん」とおだてられてはグチの出ようもない筈である。

「繁さん、よかったネー」

〔繁次郎馬鹿囃(下)〕一九六九年

(傍線は筆者)

④河野常吉編著『北海道史人名字彙(下)』(注2)には次のように記述されている。

ふくた しげじらう 福田繁次郎

奇人なり。天保元年松山の江差在五勝手の農家に生れる。幼にして父を喪ひ、母に事へて孝なり。父歿後家産漸く傾き、遂に貧困に陥り、江差に移りて賃傭し、以て老母を養ひ、承歿至らざるなく、且つ母の意を損せんことを慮れ終身娶らずと云ふ。頓才あり滑稽諷刺口を衝て出で、人の頤を解き又能く人の肺腑を抉ぐる。繁次郎金に窮し家を抵当として金を借る。期限を過ぐるも返さず。債主繁次郎を詰りて「お前の家を流して了うぞ」と云ふや繁次郎直に家に帰り、太繩を家の柱に結び、其端を向家の大黒柱に繋ぎ道路を遮断したり。折柄代官通りかかりて往来の妨害たると咎め、且つ其の所以を問ふ、乃ち愁然として「家が流るるから縛りたり」と答ふ。代官其意を諒し、債主を宥めたりと云ふ。又或時繁次郎番屋にて稼ぎ居たるに、主家の番頭某米一俵を出し来り、繁次郎に「之を家に担ぎ行け」と命ず。繁次郎念を押したるに、番頭は「内へ担ひて行くんだ」と云ふ。依つて繁次郎は、之を自宅に運びて母を喜ばしむ。後、番頭は家に帰り見たるに、米のあらざれば、繁次郎を呼びて之を詰る。繁次郎曰く、兄吾が貧窮を憫みて恵与されたるものと思ひ、既に其半ばを債主に返却したりと答ふ。是の米は、番頭が主家より窃取したるなれば、如何ともすること能はず。啞然として黙止したりと云ふ。繁次郎の行動、常に人の意表に出づる斯の如し、以て其の一斑を窺ふべし。明治二五年歿す。年六十三。

⑤函館新聞(夕刊)『道南イソップ物語』「トンチの神様繁次郎さん①」には次のように記述されている。⑤⑥は中村純三の紹介である。

「大島小島の間通る船は江差通いか懐かしや・…」追分節で知られる江差の名を一そう高いものにした「江差の繁次郎」という色物男の

話は、道南に生まれ道南に育った者なら大抵一度や二度や耳にしている、冬の爐話しの好材料を遺してくれた男として古くから親しまれているのである。

この繁次郎という人物は素晴らしく頓智頓才に富んだ男で至るところにユーモアとワイットを撒き散らしており、この奇人の数々のエピソードはいまに至るもなお道南人の懐古的な夢の中にほのぼのと生きていて、ちょうど三平汁の味と同じように、捨てがたい一つの大きな魅力とさえなっている。開道八十年の歴史の蔭にひそむ繁次郎の小話を世に贈り、温い当時の人情を回想してみる(中村記者)

「江差の繁次郎」とは一体どんな男であったか、系図が伝わっていないので詳しいことは分らないが、文化の生れ、明治の初年に六十歳前後で死去したというのが本当らしい。厚沢部村蛾虫の産で本名福田繁次郎、通称若狭屋の繁次郎で通っていた泊村の城の口部落に長く住んでいたことだけは事実で、生家は能登衆でキンツバ屋兼一パイ屋だったといわれている。現に末孫だといわれる福田政次郎なる人物から生まれつき人心収らん術のようなものを心得ていたらしい、それというのも結局は彼の行くところ頓智頓才と笑いの連続だったからで漁場親方の中には繁次郎を大漁のマスコトとして二人分の給金を奮発した人もあったというから面白い、いまあの世にいる繁次郎に「アンタも本道開発功労者の一人ですよ」といったならば彼は恐らく目玉をグリグリさせながら「馬鹿コケ(言うな)ナド(お前達)まだオラばボンボケラガス(おだてる)のだべよ」と頭をかくに違いない、以下集録した小咄は沢山の語り伝えの中から撰って比較的興味のある話だけを集めての当時の道南特有の方言を用いて繁次郎の人生路上を通ってみる

⑥函館新聞(夕刊)『道南イソップ』「セガレ繁次郎①」によると繁次郎

には「セガレ(息子)」がいることになっている。

次男の繁吉は顔も気持ちも父親そっくりで小さい時から大のイタズラ者、とても畳の上で往生は出来まい、といわれたほどだが後年積丹半島でニシン場を経営したり北見に乗り込んで新漁田を開発して成功を収めた。と伝えられる一説には上の國の若狭某へムコ養子に入った後、各地を転々として漁場を営んだとも言われるが、日清戦争と前後し物故したらしく子供が無かったために晩年の消息は不明である。序に書き添えて置くが繁次郎の長男東五右衛門には男、女二子あり男子を由太郎といつて泊村城の口に住んだ…その養子の政次郎さんが函館市堀川町に現存しているので血統ではないが繁次郎の一族?の正統というわけである。

では二代目繁次郎の頓智話から失敗談を書いて再び笑いを取り戻して頂く事にする。

(三) 中村純三版『江差の繁次郎』話の話名

以下は「話名」を紹介する。

① 函館新聞(夕刊)連載の「江差の繁次郎」一覧は附録別表Aの通りである。

② 中村純三『江差の繁次郎』話の話名(函館新聞社 一九四九年一月 一〇二頁)

トンチの神様繁次郎、第一話 クサリ馬、第二話 大飯身の毒、第三話 おしる粉と火事、第四話 喧嘩からいも、第五話 カンカラカンノカン、第六話 裸道中に褒美、第七話 繁次郎の算術、第八話 観音さんの日、第九話 ニシン神様の始め、第十話 一番ドリコ、第十

一話 あと月二日、第十二話 ニシン潰し、第十三話 よだれか酒か、第十四話 木違いの話、第十五話 ものかくし、第十六話 ハラワン、第十七話 米三俵を背負う、第十八話 鐘は鳴る鳴る、第十九話 屋根やが将棋、第二十話 馬をパクる、第二十一話 一ぱいのイカ、第二十二話 貧乏神様、第二十三話 十敷と十敷、第二十四話 シコロの木、第二十五話 「似と煮」違い、第二十六話 草葉の蔭、第二十七話 母親の眼病、第二十八話 酒は毒々、第二十九話 モチを一白、第三十話 マンマ、第三十一話 売拂つた短刀、続第三十一話 売拂つた短刀、

セガレ繁次郎、第三十二話 豆腐ガケ、第三十三話 せんべい團子、第三十四話 繁次郎の石腸、第三十五話 木葉役人ゴ、第三十六話 コツバよい、第三十七話 故郷の便り、第三十八話 函館へ赤ケツト、第三十九話 ベゴコク、第四十話 黄色い鳥、第四十一話 河童に合羽、第四十二話 ヤミ夜のカラス、第四十三話 九艘暗い

③中村純三『続 江差の繁次郎』話の話名(函館新聞社 一九五〇年三月 一一八頁)

まえがき、第一話 法華寺のムジナ、第二話 足駄と日和、第三話 ラジオ飲食、第四話 飯も二人前、第五話 今度は五人分、第六話 五足のワラジ、第七話 センの木、第八話 ケンカの仲裁、第九話 火事と餅、第十話 傷の妙薬、第十一話 ホラの種、第十二話 ニセ金、第十三話 通夜の膳、第十四話 ガシガシ、第十五話 海カレ、第十六話 重いヨロイ、第十七話 成るほど将棋、第十八話 サオノボリ、第十九話 初恋?、第二十話 火消し稼業、第二十一話 見ん

ごと、第二十二話 津軽弁コ、第二十三話 イサバ屋、第二十四話 ヤキ芋、第二十五話 臆病の薬、第二十六話 繁次郎絵師、第二十七話 アミダの膳、第二十八話 婆の幽霊、第二十九話 香典返し、第三十話 畑違いの話、第三十一話 借貸論、第三十二話 傘屋草履屋、第三十三話 笑い婆さん、第三十四話 歌問答、第三十五話 お姫様の恋、第三十六話 アマゴイ?、第三十七話 泥棒の釣鐘、第三十八話 アテとフンドシ、第三十九話 コン畜生、第四十話 ジンギリだけは、第四十一話 狸の悪だくみ、第四十二話 ヨシの山、第四十三話 讚門の世辞、第四十四話 十何人?、第四十五話 うなり金、第四十六話 村もオガル、第四十七話 役にん立たず、第四十八話 アイの風、第四十九話 船頭のイカリ、第五十話 アンマ落し、第五十一話 この野郎目、第五十二話 茶碗に六杯、第五十三話 寝ても分る、第五十四話 ボタ餅談義、第五十五話 トロロきらい、第五十六話 食い競べ、第五十七話 親父とワラジ、第五十八話 カラス問答、第五十九話 似ている、第六十話 二人繁次郎

④中村純三『真説 江差の繁次郎』話の話名(ぶやら新書 沖積舎一九六三年五月 六三頁)

ケンカの話、草食う馬、しる粉と火事、あと月二日、一番ドリ、ニシンの神様、まあ三十、身の毒、観音さんの日、タテ一本、ニシン潰し、ヨダレ酒、ハラワン、カネは鳴る、似ちがい、屋根屋が将棋、草葉の蔭、一口豆腐、役人コ、黄色い鳥、せんべい團子、イサバ屋、ヤキ芋、キンキラキン、二人前、五足のワラジ、センの木、俺のモノ、オガル、村もオガル、十敷、読み込み、カラス問答、イカーパイ、貧乏の神、もの隠し、足駄と日和、母の眼病、モチを一白、讚門世辞、十何人、

成金の寄付、アイの風、イカリ、握りママ、二つの口、葉ツパコ、権限詣で、あとがき

⑤中村純三『蝦夷風流譚』での話名（函館百点 一九六六年十一月 一四〇頁）

放さね、天日干し、さては！、キノコ、親不幸、下口にも、葉ツパコ、握りママ、人間の倅せ、のべつまくなし、シヨウブは屋根、ペゴの突、勝手にせい、行く行く、イイカ、カニの甲羅、信心、唐キミの話、親不孝、イカサマ説、輪（ワツカ）、アメノヌボコ、とぎ汁、朝なんとやら、燃えるタイプ、きつぱり、戻り道、日本婦人は固い、堅物、お道具拝見、豆ひろい、三傑物、カリガネ、馬並み、松茸、ピカピカ頭、縁（ふち）まで、梅干し、屁こり、豆拾い、乳首、不調法者、塀の子、尻を捲くる、スッポンの頭、衝撃療法、小男の…、十三ピヨピヨ、指、早や腰、ホラクラベ、しめり具合、出口の恥、坊様の好物、裸（はだか）、これ以上は、残し物、金床の尻、禪問答、色即是空、ブツ法、信心家、坊主憎けりや、ヒゲ剃り、オガレ、桃売り、大八車、隠居、白と杵、落ちた看板、江戸の仇を、水掛論、ヨダレコ、犬の仔、一つき百文、夜回り、イモ勘定、イモ潰し、ケンチン汁、ケツマク炎、ハエ、ツル・カメ、一回に一人、強精法、本陣争い、畜生道、豆談義、マタタビ、汝干狩り、おがつた馬、トラバサミ、寅は千里、アイヌ語、オロシヤ語、コノ道バカリ、バックオーライ、シバれる、軽石男、碁・将棋、もう一度、信仰、お台場、大嵐、小野小町、大入道、枯草、葉鐘吊り、匂い袋、酒と水

⑥中村純三『続 蝦夷風流譚』での話名（函館百点 一九七三年十二月

月 一一〇頁）

序文、摺り鉢、めぐり棒、訪問お断わり、馬並み、砂出し、マジナイ、探し物、年数なら、だれの金？、泥棒！、生まれ在所、絵とき、血筋、底と底、サラと皿、品物と品物、碁・将棋、もう一度、アイヌ語、オロシヤ語、コノ道バカリ、バック、軽石男、シバれる、拾い食い、昼は困る、熊の毛皮、垣根、前と後、船賃、色事中、おつき合い、泣きどころ、ツユ時、大根よりも、お前と同じ、立派な証拠、才女、仲裁人、妹娘も、倅が先、ケンライ、寝催促、芋田楽、居心地、診たて、濃い薄い、一朱のムスコ、同罪、極楽の間、地獄の間、二度芋、ゴシヨ芋、立つてる物、大好物、お供え物、恐い棒、万金棒、敵討ち、番所の厠、懺悔、清め給え、著者しるす

まとめ

話者であり、翻案者であり、創作者である中村純三は函館新聞社時代の同僚の証言（注3）では型破りの新聞人であったようである。話者の語りをもそのまま再現するというような人物ではないと言える。繁次郎話も権力者をやっつけて溜飲を下げるという庶民の代弁者という話からしだいに艶笑譚へと軸足を移行させている。中村自身が述べているように日本・フランス・イソップなどの小話を繁次郎版に創作している。その結果が『江差の繁次郎』（函館新聞社出版部一九四九年一月から同年四月までに三版）、『続江差の繁次郎』（同社出版部一九五〇年三月）から『蝦夷風流譚』（株函館百点 一九六六年十一月）、『続蝦夷風流譚』（株函館百点一九七二年十二月）へと変化している。

本論では、個々の「繁次郎」話の分析を今後の課題にするが、以下のように推測できる。

一、新聞人中村純三が太平洋戦争直後の混乱期を乗り切るものとして繁次郎話を位置づけて世相に請われるままに創作活動を続けた。その結果が多くの人々に影響を与えることになった。時代の要請に応えたということである。

二、第一節の事例のように太平洋戦争以前、鯨場で語られた繁次郎話が北海道のみならず東北地域においても語られた。それは花部英雄、新田寿弘、野村純一・佐々木達司の記録・論考からわかる。北海道地域の調査を現時点で可能かどうかをさらに探り、考察を深めたい。

三、中村純三自ら吐露したり、元同僚の上野理一郎氏の証言にあるように、一九四八年十一月からの「函館新聞(夕刊)」連載の第五回(十三話)迄の繁次郎話は、聞き取りをもとにした翻案であることがわかる。それ以後は、中村純三の創作性が高い。鯨場で語られた話と中村純三創作の話の区別をすることは、さらに厳密な分析が必要である。

四、今後の課題はたくさんある。中村純三が活動開始時点の時代背景を函館新聞紙面でさらに考察すること、イソップ寓話・フランス小咄・落語などからの中村の援用状況を探ることがある。

五、日本各地のおどけ者話との比較を行いながら、北海道の鯨漁を基盤にしたおどけ話の特質を探りたい。

謝辞

北海道立図書館、函館市中央図書館、函館市史編纂室、北星学園大学図書館、そして細見一夫氏(函館市在住)、佐々木達司氏(青森・五所川原市在住)、新田寿弘氏(青森・弘前市在住)、花部英雄氏(國學院大學)にお世話になりました。今後ともご指導ください。

注

- (1) 花部英雄・新田寿弘編『江差の繁次郎話』(青森県昔話) 記録1 同会 昭和五五年十月)、花部英雄「繁次郎話考―青森県を中心に―」『口承文藝研究』第五号 同学会 昭和五七年五月)
- (2) 北海道出版企画センターから昭和五四年十一月発行されたものを引用している。高倉新一郎の「北海道史人名字彙について」という説明に次のように説明されている。この本は「大正七年開道五十年を迎えるに当たって、北海道庁が記念として編纂刊行した『北海道史』の一部として蒐集編纂されたものである。」と記述されている。中村純三が新聞掲載以前から北海道開拓者の一人として「福田繁次郎」(江差の繁次郎)が紹介されている。
- (3) 細見一夫氏には、写真と説明書のお手紙などをご提供いただいた。また、上野理三郎の文章からも推測出来る。

参考文献

- (本文中で紹介・引用した文献は省略した)
- ・中村純三『江差の繁次郎』『続江差の繁次郎』みやま書房 一九七七年
 - ・花部英雄「繁次郎話の語り手」『野村純一編昔話の語り手』法政大学出版

局 一九八三年
・野村純一「江差の繁次郎」事情、花部英雄「ニシンバの笑い」『北海道を探る（第二四号）』北海道みんぞく文化研究会 一九九二年



1953年秋、同僚と。右端、ベレー帽の人が中村純三氏。
(写真提供；細見一夫氏)

別表 A

函館新聞 (夕刊) 連載 道南イソップ物語 江差の繁次郎

連載回数	繁次郎話数	題名	発行日 1948年(昭23)
①	1～2	第1話 クサリ馬、第2話 大飯身の毒	11月9日(No. 706)
②	3～5	第3話 おしる粉と火事、第4話 喧嘩からいも、第5話 カンカラカン	11月10日(No. 707)
③	6～8	第6話 裸道中に褒美、第7話 繁次郎の算術、第8話 観音さんの日	11月11日(No. 708)
④	9～10	第9話 ニシン神様の始め、第10話 一番ドリコ	11月12日(No. 709)
⑤	11～13	第11話 あと月二日、第12話 ニシン潰し、第13話 よだれか酒か	11月13日(No. 710)
⑥	14～16	第14話 木違いの話、第15話 ものかくし、第16話 ハラワン	11月14日(No. 711)
⑦	17～20	第17話 米三俵を背負う、第18話 鐘は鳴る鳴る、第19話 屋根やが将棋、第20話 馬をバク	11月15日(No. 712)
⑦ (⑧)	21～22	第21話 一ぱいのイカ、第22話 貧乏神様	11月16日(No. 713)
⑧	23～25	第23話 十敷と十敷、第24話 シコロの木、第25話 「似と煮」違い	11月17日(No. 714)
⑨	26～28	第26話 草葉の蔭、第27話 母親の眼病、第28話 酒は毒々	11月18日(No. 715)
⑩	29～30	第29話 モチを一白、第30話 マンマ	11月19日(No. 716)
⑪	31～	第31話 売拂った短刀	11月20日(No. 717)
⑫	続31～	第31話 売拂った短刀	11月21日(No. 718)

函館新聞 (夕刊) 連載 セガレ繁次郎

連載回数	繁次郎話数	題名	発行日 1948年(昭23)
①	32～34	第32話 豆腐カケ、第33話 せんべい團子、第34話 繁次郎の石腹	11月22日(No. 719)
②	35～36	第35話 木葉役人コ、第36話 コツパよい	11月23日(No. 720)
③	37	第37話 故郷の便り	11月24日(No. 721)
完	38～40	第38話 函館へ赤毛布、第39話 ベゴコク、第40話 黄色い鳥	11月25日(No. 722)

別表 B

函館新聞社「江差の繁次郎」	『青森の「繁次郎ばなし」』	『増毛地方の民俗資料と文化財』	江差文庫社「江差の繁次郎」	『乙部町史 下巻』
クサリ馬		草食う馬?	クサリ馬	
大飯身の毒				
おしる粉と火事				
喧嘩からいも				
カンカラカンノカ				
裸道中に褒美				
繁次郎の算術			六人と六人で九人?	
観音さん日	観音様の日は休み	観音さんの日は休み	観音さまの日	観音さんの日
ニシン神様の始め	枠回せ?		ニシン群衆	枠まわせ?
一番ドリコ				
あと月二日	借金は払わん-後月の二日払い			
ニシン潰し	ニシンつぶし		ニシンつぶし	
よだれか酒か			ヨダレまがれる	
木違いの話			シコロの木?	シコロの木?
ものかくし				
ハラワン	借金は払わん-のどつけカミソリ		はらわん	

逆さ手綱 逆さ手綱と枠回せ シリつなぎ おれはカモッコ 鱸をとれ 忙しい時は ニシン読み 二人前の条件 餅米がない 刀の先 五寸釘 タデで一本 みやげを回す ユルカイ村ニシトラノスケ ニシンのタマシ	草葉の陰 闇夜のカラス 残りは雪なげ あいの風 ホラ吹き合戦 ニシンとり 山の薪切り 合わせて六本 イカが一ぱい クルマゲ	鍋ぶた試合 つなぎづら 白足袋と黒足袋 ヤミ夜のカラス 明朝と翌朝 いも鍋のふた 焼きイモ 火つけの餅 満腹 棺おけから手 貧乏の神 屋根裏の将棋 下駄と草履 四人力 大きなスイカ 茶店の婆さま 火事 橋の上 お代わり とんだ漬物 番傘と雁の字 近所のわらし 餅つきばやし お歳暮	針供養 ナヘー・ワヘー 夫婦げんか とんでもないカレイ 草葉の陰 アガかく 鳥居の切り落とし おにがわら センの木 土に一字 関所の役人コ わらじ百足 門構え つば焼き めがね タケノコ・キノコ 下駄屋 かん酒 池の月 茂尻湯の追分 医者を呼ぶ 葬式まんじゅう 関係ない お月さんエライ	古い梅酒 旅商人 子を生む鍋 スイカの食べ方 ヒヨコの喪服 奥のシロアリ 時分どきのトリ 笛の腹 金の刀 フーフーの子 小石・小糖 イワシは紫 えびす講 クマの毛皮	繁次郎のいいつけ 帽子に鳥こ
---	--	---	--	---	-------------------

別表C

『函館百点』 株函館百点			
蝦夷風流譚			
号	西暦(和暦)	頁(p)	内容
2	1962. 5(昭37)	54-55	放さね、天日干し、さては！！
6	1963. 2(昭38)	14-15	イカサマ説、輪(ワッカ)、アメノヌボコ、とぎ汁、朝なんとやら
7	1963. 3(昭38)	40-	燃えるタイプ、きっぱり、戻り道
8	1963. 4(昭38)	40-41	日本婦人は固い、堅物、お道具拝見、豆ひろい
9	1963. 5(昭38)	38-39	三傑物、カリガネ、馬並み、松茸
10	1963. 6(昭38)	38-39	ピカピカ頭
12	1963. 8(昭38)	42-43	梅干し、尻こり、豆拾い、乳首
13	1963. 9(昭38)	38-39	不調法者、塀の子
14	1963.10(昭38)	42-43	尻を捲くる、スツポンの頭、衝撃療法
16	1963.12(昭38)	40-42	小男の……、十三ピヨピヨ、指、早や腰
17	1964. 1(昭39)	40-41	しめり具合、出口の恥
18	1964. 2(昭39)	42-43	坊様の好物、裸(はだか)、残し物、金床の尻
19	1964. 3(昭39)	42-43	禅問答、色即是空
20	1964. 4(昭39)	44-45	ブツ法
21	1964. 5(昭39)	41-43	閑話休題、信心家、坊主憎けりゃ、ヒゲ剃り
22	1964. 6(昭39)	40-41	オガレ、桃売り、大八車、隠居
24	1964. 8(昭39)	38-39	護符、ヨダレコ、犬の仔、一つき百文、夜回り
『月刊はこだて』 株函館百点			
蝦夷風流譚			
号	西暦(和暦)	頁(p)	内容
25	1964. 9(昭39)	38-39	護符の読み方、イモ勘定、イモ潰し
26	1964.10(昭39)	37-39	ケンチン汁、小野道風
27	1964.11(昭39)	37-39	ケツマク炎、ハエ、ツル・カメ
29	1965. 1(昭40)	39-41	豆談義、ヤブヘビ、キノコの注文
30	1965. 2(昭40)	37-39	マタタビ、汐干狩り、おがった馬
31	1965. 3(昭40)	29-31	前置き、トラバサミ、寅は千里
32	1965. 4(昭40)	37-39	底と底、サラと皿、品物と品物
33	1965. 5(昭40)	37-39	アイヌ語、オロシヤ語、コノ道バカリ
34	1965. 6(昭40)	37-39	バックオーライ、軽石男、シバれる
35	1965. 7(昭40)	30-32	碁、将棋、もう一度
36	1965. 8(昭40)	6-14	(艶歌 流しの生態を語る 対談)
38	1965.10(昭40)	40-42	余り駄語、小野小町、大入道
40	1965.12(昭40)	44-45	匂い袋、酒と水
巷説 江差の繁次郎			
41	1966. 1(昭41)	38-40	はじめに、もう一つはじめに、草食った馬、身の毒
42	1966. 2(昭41)	36-38	汁粉と火事、ケンカの話、まあ三十、観音様の日、後ゲツの二日
43	1966. 3(昭41)	41-43	タテ一本、隠し物、ハラワン
44	1966. 4(昭41)	41-43	ニシンの神様、一番ドリ、三俵は背負う
45	1966. 5(昭41)	41-43	カネは鳴子、屋根裏の将棋、似ちがい、草葉の蔭、一口豆腐、せんべい、団子、役人
46	1966. 6(昭41)	41-	足駄と日和、ニセ金、イサバ屋、ヤキ芋、貧乏の神
47	1966. 7(昭41)	41-43	キンキラキン、二人前、五足のワラジ、ベココク
48	1966. 8(昭41)	39-41	センの木、俺の物
49	1966. 9(昭41)	41-43	仕返し、オガル
50	1966.10(昭41)	41-43	村もオガル、読み込み、黄色い鳥
51	1966.11(昭41)	40-41	カラス問答
52	1966.12(昭41)	33-35	傷の妙薬、法らの種
続・蝦夷風流譚			
53	1967. 1(昭42)	32-33	絵とき、血筋
54	1967. 2(昭42)	37-39	摺り鉢とめぐり棒、広告・蝦夷風流譚、広告・中村純三 「繁次郎の色の道教えます」
55	1967. 3(昭42)	39-41	だれの金？、泥棒！、生れ在所

別表D

56	1967. 4(昭42)	37-39	一朱のムスコ、同罪
58	1967. 6(昭42)	38-39	診たて、薄い濃い
59	1967. 7(昭42)	38-39	ツユ時、大根よりも
60	1967. 8(昭42)	37-39	訪問お断わり、馬並み
61	1967. 9(昭42)	38-39	おつき合い
62	1967.10(昭42)	38-39	砂出し、マジナイ、探し物、年数なら
63	1967.11(昭42)	38-39	垣根、前と後、船賃、色事中
64	1967.12(昭42)	32-33	拾い食い、昼は困る、熊の毛皮
65	1968. 1(昭43)	38-39	お前同じ、立派な証拠、才女、仲裁人
66	1968. 2(昭43)	34-35	妹娘も、作が先
67	1968. 3(昭43)	38-39	地震の歌、玉くらべ、生娘
68	1968. 4(昭43)	38-39	寝催促、芋田楽、居心地 <繁次郎対談 26-29 p 関勝>
69	1968. 5(昭43)	40-41	先の亭主、犬の話、狐と馬
70	1968. 6(昭43)	36-37	ケンライ
71	1968. 7(昭43)	36-37	感涙
72	1968. 8(昭43)	44-45	極楽の門、地獄の門
73	1968. 9(昭43)	38-39	ニド芋、ゴショ芋、立ってる物
74	1968.10(昭43)	38-39	—
75	1968.11(昭43)	38-39	恐い棒 <26-27 p 「繁次郎馬鹿囃(上)」上野理一郎>
76	1968.12(昭43)	38-39	万金棒 <36-37 p 「繁次郎馬鹿囃(中)」上野理一郎>
77	1969. 1(昭44)	41-43	仇討ち
78	1969. 2(昭44)	35-37	懺悔 <15-16 p 「繁次郎馬鹿囃(下)」上野理一郎>
79	1969. 3(昭44)	35-37	清め拾え
80	1969. 4(昭44)	41-43	絶倫、利子
81	1969. 5(昭44)	37-39	ヒガン
82	1969. 6(昭44)	42-43	一番目は、大根、精力剤、歌比べ、坊主頭
83	1969. 7(昭44)	46-47	患者失い、診立て、不貞寝病、床に生える
84	1969. 8(昭44)	46-47	新しい嫁
85	1969. 9(昭44)	41-42	びっくり、水、ウナギ
86	1969.10(昭44)	21-22	お返し、痛し痒し
87	1969.11(昭44)	43-45	大と小、ヒリヒリ話、名医
88	1969.12(昭44)	43-45	—
89	1970. 1(昭45)	42-44	—
90	1970. 2(昭45)	43-44	効き目、指で幸い
91	1970. 3(昭45)	32-34	手にかかる、酒の肴
92	1970. 4(昭45)	43-44	懺悔減罪
93	1970. 5(昭45)	43-44	一腫れ物
94	1970. 6(昭45)	43-44	男嫌い
95	1970. 7(昭45)	41-42	引っ越し
96	1970. 8(昭45)	45-46	ムスメ殿
97	1970. 9(昭45)	43-44	前の穴
98	1970.10(昭45)	43-44	白酒、三突き
99	1970.11(昭45)	39-40	としごろ
100	1970.12(昭45)	41-42	ライバル
101	1971. 1(昭46)	41-42	強敵出現
102	1971. 2(昭46)	39-41	ダース
103	1971. 3(昭46)	41-42	鼻毛抜き
104	1971. 4(昭46)	40-42	穴の話
105	1971. 5(昭46)	39-41	閑話、<乙部の元和の浜で大往生? 江差の繁次郎異聞>
106	1971. 6(昭46)	41-42	消毒棒
107	1971. 7(昭46)	41-42	怪我ない
108	1971. 8(昭46)	39-40	品評会
109	1971. 9(昭46)	40-42	青りんごと桃、二人とも上
110	1971.10(昭46)	41-42	風の穴
111	1971.11(昭46)	41-42	三人前
112	1971.12(昭46)	45-46	お仕置、臥薪嘗胆
117	1972. 5(昭47)	40-42	敵は本能寺、野良猫

別表E

120	1972. 8(昭47)	43-45	(題名なし)
121	1972. 9(昭47)	43-45	正直者
122	1972.10(昭47)	47-49	戌年生まれ
123	1972.11(昭47)	43-45	半分、閑話休題
124	1972.12(昭47)	47-48	うえした、寝るたび
125	1973. 1(昭48)	47-49	老色気
126	1973. 2(昭48)	45-47	やけ酒
127	1973. 3(昭48)	45-47	竹の皮
128	1973. 4(昭48)	46-47	品物
129	1973. 5(昭48)	46-47	セイキ学
130	1973. 6(昭48)	45-47	(題名なし)
131	1973. 7(昭48)	45-47	蔭まん
132	1973. 8(昭48)	45-47	裾狐臭
133	1973. 9(昭48)	41	豆腐粕
134	1973.10(昭48)	45-46	白足袋
135	1973.11(昭48)	45-47	豆腐屋
136	1973.12(昭48)	45-47	下の国
137	1974. 1(昭49)	46-47	膿
138	1974. 2(昭49)	45-47	筆間余話
139	1974. 3(昭49)	37-39	コーフン
140	1974. 4(昭49)	41-43	仲直り
141	1974. 5(昭49)	45-46	ノリの道、上は上
142	1974. 6(昭49)	45-47	中条流、右半身、スリコギ
143	1974. 7(昭49)	45-47	小指?、店賃 <34-39 p 阿部文男 中村純三>
144	1974. 8(昭49)		
145	1974. 9(昭49)	44-46	修業
146	1974.10(昭49)	44-46	小作
147	1974.11(昭49)	45-47	金精様
148	1974.12(昭49)	40-42	赤猫
149	1975. 1(昭50)	40-42	効能
150	1975. 2(昭50)	43-45	コビリ飯
151	1975. 3(昭50)	44-46	万回
152	1975. 4(昭50)	45-47	(題名なし)
153	1975. 5(昭50)	45-47	ヤチ
154	1975. 6(昭50)	45-47	筆間駄話
155	1975. 7(昭50)	45-47	カラス
156	1975. 8(昭50)	45-47	雨乞
157	1975. 9(昭50)	45-47	降って来た
158	1975.10(昭50)	44-46	口は禍のもと
159	1975.11(昭50)	46-47	怪我なし
160	1975.12(昭50)	45-47	(題名なし)
161	1976. 1(昭51)	42-45	(題名なし)
162	1976. 2(昭51)	43-45	正月の膳
163	1976. 3(昭51)	43-45	(題名なし)
164	1976. 4(昭51)	43-45	手伝人
165	1976. 5(昭51)	43-45	燃える石
166	1976. 6(昭51)	43-45	棒引
167	1976. 7(昭51)	42-44	水びたし
168	1976. 8(昭51)	40-42	串柿
169	1976. 9(昭51)	42-44	完潤の女
170	1976.10(昭51)	42-44	筆間駄話
171	1976.11(昭51)	42-44	(題名なし)
172	1976.12(昭51)	42-44	(題名なし)
174	1977. 2(昭52)	40-44	鉄砲、道具とハサミ
175	1977. 3(昭52)	42-44	ネギマ
176	1977. 4(昭52)	42-44	檜炭
177	1977. 5(昭52)	4244	呼び合い

別表 F

178	1977. 6(昭52)	42-44	ジョッピン、閑話休題
179	1977. 7(昭52)	42-44	餅搗囃子
181	1977. 9(昭52)	43-45	ソーラン考(上)
182	1977.10(昭52)	41-42	ソーラン考(下)
月刊はこだて百号			
続・蝦夷風流譚			
	1963.10(昭38)	41-42	ライバル

別表 G

「繁次郎」に関連する主な文献一覧

- ・安楽庵策伝、鈴木棠三校注 1986『醒睡笑(上)(下)』(岩波文庫版) 岩波書店
- ・天草本、新村出訳 1939『伊曾保物語』(岩波文庫) 岩波書店
- ・万治絵入本、武藤禎夫校注 2000『伊曾保物語』(岩波文庫) 岩波書店
- ・山本光雄訳 1942『イソップ寓話集』(岩波文庫) 岩波書店
- ・中務哲郎訳 1999『イソップ寓話集』(岩波文庫) 岩波書店
- ・田辺貞之助 1973『フランス小話傑作集』潮文社
- ・田辺貞之助 1974『続ふらんす小咄大観』青蛙房
- ・森本英夫・西澤文昭 『フランス中世滑稽譚』(現代教養文庫) 社会思想社
- ・河盛好蔵編訳 1991『ふらんす小咄大全』(ちくま文庫) 筑摩書房
- ・佐々木達司・新田寿弘編 2008『青森の繁次郎ばなし』青森県文芸協会
- ・平井信作 1979『津軽艶笑譚 第八集』津軽書房
- ・藤沢美雄 1974『岩手艶笑譚』津軽書房
- ・無明舎出版編 1980『秋田艶笑譚(正)・(続)・(続々)』無明舎出版
- ・佐々木徳夫 1979『民話・みちのく艶笑譚』ひかり書房
- ・佐々木徳夫 1994『東北艶笑浮世ばなし』講談社
- ・佐々木徳夫 1996『みちのく「艶笑・昔話」探訪記』無明舎出版

[Abstract]

A Study of Hokkaido Folk Tales No. 7 :

A Study of the Creation and Inheritance of “Esashi no Shigejiro” Junzo Nakamura Version

Toshio ABE

One category of Japanese folklore funny stories is called “KOUCHITAN” (Clever story). In “KOUCHITAN,” often a “clown” character represents common people and argues with authority. In this study, “Esashi no Shigejiro,” who has been considered as “Clown of the North,” is introduced and his creator, Junzo Nakamura who had also worked for a newspaper company, is examined. The purpose of the study is to reveal the background and contents of the stories of Shigejiro.

Junzo Nakamura’s versions of “Esashi no Shigejiro” were created during the chaotic period right after the Pacific War, based on the existing popular tales from before the conflict.

Junzo Nakamura had turned them into humorous anecdotes and passed them on. By telling “funny stories” to the people who were suffering mentally and physically from the war, he provided relief to their weary minds.